



TITLE:

北米合衆國の[聚]落について

AUTHOR(S):

中目, 覺

---

CITATION:

中目, 覺. 北米合衆國の[聚]落について. 地球 1926, 5(4): 290-292

ISSUE DATE:

1926-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183088>

RIGHT:

渠）を通じたブエニス市街に彷彿たる形相を示してゐる。湖面と村落地面との高度の差の少い爲めに、此等の溝に架した橋は何れも高い石垣を橋の兩端に築いて、橋下の小艇の航行を便にした點などもブエニスに似通ふ外觀である。唯その異なる點はブエニスに在つては交通機關は殆んど全くゴンドラのみなるに反し、此處では廣濶なる湖岸に接した村落に過ぎぬので、人家と溝との間に道路を残し、溝は運搬機關に利用さるゝに止り、交通に必要な道路と並用されてることである。

此の他現在急激な變化の起りつゝあるのは海岸の避暑及び避寒に適する部分で、農漁等の生業と無關係に新しい村落が發達する事實が大に注意すべき一例ではあるが、今茲に一々此の如き點を枚擧する暇がない。

村落の成立に關する考察は姑く此だけに打ち切り、次篇に於て都市の成立に就いて述べる。

## 北米合衆國の聚落について

### 中 目 覺

私は常に聚落の根本原理を研究して見たいと思ふて居るが、その違がないのは遺憾である。聚落の根本原理には第一に物質方面第二に精神方面の研究が必要と思ふが、今日までは多く物質方面の

研究が發表せられ、ハンチントン博士の如く心理方面のことを論ずる學者もないではないが、單に氣界の影響だけに止るといふ風である。私は地理的刺戟の題目の下に陸界も水界も聚落に影響があるといふ意味を發表したが、其後色々考へて見ると、まだ不充分の點が多い様に思ふ。心理方面では地理的本能といふこと随つてフロイド博士一派の精神分析學(ブシホアナリーゼ)を餘程參考せねばならぬと思ふ。就中無意識(ウンベウステス)の働きを考へねばならぬと思ふ。そして諸民族の聚落を比較研究した上で始めて根本原理が確立されるものと思ふ。これは中々の大事業であるから、學者が協力して研究する必要があると思ふ。

茲にて單に一昨年夏秋の候、米墨旅行を試みた際、私がフト氣が付いた合衆國の聚落について感想を述べて見たいと思ふ。この旅行中の見聞の一端は大阪外國語學校發行の『海外視察錄』第五號に載せて置いた。

合衆國には二百年足らずの間に急速な發展を遂げたから、色々無理があり、不自然の點が多く、社會狀態なども舊世界の目で見ると可笑な點が多い。随つて同國の聚落も人爲的で餘程不自然のものであらうと思ふて行つて見ると、之は又案外で中々當を得て居る。その理由は那邊にあるかといふことを考へて見たい。

合衆國の聚落は地名と密接の關係がある様である。

第一 インディアンの地名をそのまま踏襲したもの（編者註、オハイオ、シカゴ）

第二 歐洲にある地名を移したもの（ポーツマス、ポーランド、オルリンス）

第三 人名などから人爲的に作つたもの（コロンビア、ワシントン、セントルイス）

第一に屬するものは根本原理で説明が出来ると思ふから自然の聚落である。第二になると中々面白い。歐洲にある重なる地名は悉く合衆國にあるといふても差支ない位である。偕て歐洲の地名を移したのはどういふ動機であるかと言へば、故郷にあこがるゝといふ心理が第一に働いて居り、

ハイデルベルヒから來た移民の部落ならばハイデルベルヒと唱へる。又各地方よりの寄り集まりで出來た部落ならば、成るべく故郷の何處かと似寄つた地形の處を撰んで、その地の名をつける。ハイデルベルヒの場合であれば、撰擇の自由な處だから、成るべくハイデルベルヒに似寄つた地勢を探かすといふ事になる。それで歐洲からの移住民は聚落を作るに當りて、自然に發達した歐洲にある故郷を模倣したと考へて宜しい。そこで不自然の聚落は極めて少く、此點に於て私は驚いたのである。即ち合衆國では地理的意識に因つて多數の聚落が出来て居るがその基礎となつて居るものは地理的無意識で出來た歐洲各地にある手本である。

私の米國視察は短時日であつて、素より聚落研究の目的で行つたのではないが、以上述べた處が多少なりとも學者の參考となるならば望外の仕合である。